

かわせみ通信

発行：神奈川県自然環境保全センター
自然保護課

住所：神奈川県厚木市七沢657

TEL：046-248-6682

野外施設自然情報

バックナンバーは
HPから見られます→

自然環境保全センターの野外施設では、それぞれの季節に、生き物同士の巧みなつながりや、興味深い生命活動など、大自然の不思議な現象にふれることができます。この「かわせみ通信」では、野外施設の出来事や生き物たちの様子を紹介しています。

野外施設トピックス

場 所	できごと
M8付近	ケヤキ広場の周辺の植栽を整理し、見通しをよくする作業をしています。野生動物の潜む場所を少なくし、鉢合わせを防ぐねらいです。
Y8付近	8月は雨がほとんど降らなかった影響か、谷戸では一部の池が干上がってしまう状態が続きました。天候以外にも池の護岸が傷んで水が抜けやすくなっていることも要因と考えられます。今後、護岸の補修を行う予定です。

干上がった池Y8付近から
(8月27日撮影)

自然観察園でキツネに会える！？ 動物の名前が付く植物【キツネ編】

自然観察園には意外とたくさんキツネがいます。といっても本物ではなく、名前に「キツネ」がつく植物です。なぜ植物に動物の名前がついているのでしょうか。

植物の和名の由来は、後世の人々が後付けで解釈したものも多く、いろいろな説がありますが、「キツネ」がつく植物の名前の由来を調べてみると、人間のキツネに対するイメージが見えてくるような気がします。他にもどんな動物の名前が植物に使われているか、その由来はなんなのか、図鑑やネットで調べる前に自分で想像してみるのもおもしろいかもしれません。

ふさふさしっぽの
持ち主は？花穂がキツネの尾に
似ていることが由来。
他にも諸説もありキツネノマゴ(キツネノマゴ科)
花期：8月～11月ごろ 場所：観察路脇薄暗い林に
ぼんやりと…オレンジ色の花が
狐火に見えることが
由来。カミソリは葉
の形からキツネノカミソリ(ヒガンバナ科)
花期：8月下旬ごろ 場所：N12付近キツネに
化かされた！？アザミだと思ったら…
よく似ていますがトゲ
はありませんキツネアザミ(キク科)
花期：5月～6月ごろ 場所：Y16付近葉は牡丹に似て
いるけれど、
花は…？ケキツネノボタン(キンポウゲ科)
花期：5月～9月初旬ごろ 場所：観察路脇ホンモノも
いるよキツネ(イヌ科)
運がよければ出会えるかも！？

黄色と黒のトンボは何トンボ？

自然観察園では春から晩秋にかけてさまざまなトンボ類を観察することができます。この理由として自然観察園が谷戸と呼ばれる水が集まりやすい環境にあることが挙げられます。谷戸は木々に覆われ全体的に薄暗く、水たまりのようにあまり水の流れのない池と、その脇を流れる沢があり、種類によって好む環境が違うさまざまなトンボが生息できます。

その中でも大きめな黄色と黒のトンボは存在感があります。飛びスピードがとても速く、すべてオニヤンマかな？と思ってしまいますが、園内で記録されている黄色と黒のトンボはオニヤンマを含めて18種類ほどいます。これらは大まかに4つのグループに分けられます。



谷戸の池

谷戸でみられる黄色と黒のトンボたち

特徴		グループ	谷戸で確認されている種
目が離れている		サナエトンボ科	ヤマサナエ、オジロサナエ、ダビドサナエ、コオニヤンマ、ウチワヤンマ
目の一部がくっついている		オニヤンマ科	オニヤンマ
目が完全にくっついている	胸に光沢がない	ヤンマ科	サラサヤンマ、コシボソヤンマ、ミルンヤンマ、カトリヤンマ、マルタンヤンマ、ヤブヤンマ、オオルリボシヤンマ、ルリボシヤンマ、クロスジギンヤンマ、ギンヤンマ
	胸に光沢がある	ヤマトンボ科	オオヤマトンボ、コヤマトンボ

2012年以降に自然観察園で確認されているトンボ類

▶サナエトンボ科

主に清流に生息するトンボのグループです。他のトンボに比べ早い時期から出現する種類が多く、飛んだらすぐに止まります。コオニヤンマやウチワヤンマなど名前に“ヤンマ”とついていますが、目が離れているためサナエトンボの仲間です。

▶オニヤンマ科

日本に2種類のみ生息する、日本では最大サイズのグループです。園内ではオニヤンマのみ生息しています。沢沿いを這うように飛び、緑色に輝く複眼がよく目立ち、人が近づいても逃げずに悠然と飛びます。



ヤマサナエ：園内で一番よく見られるサナエ。森の中の清流を好み、春から初夏にかけて観察できます



オニヤンマ：池や、やや流れの弱い川を好み、初夏から秋にかけて観察できます。卵から成虫まで3～4年かかります

▶ヤンマ科

池から沢までさまざまな環境に生息しています。非常に速く飛びのものが多く、種類も多いので見分けるのが大変なグループです。比較的大型のものが多く、オスとメスで体の模様や目の色が違うことがあり、体が黄色と黒の模様のものはオニヤンマと間違われていることがあります。

▶ヤマトンボ科

谷戸ではコヤマトンボとオオヤマトンボの2種類が観察されています。ヤンマと同じく目が完全にくっついていることと、胸が緑色に鈍く輝くことがヤマトンボ科の特徴です。他のトンボに比べ大型です。



サラサヤンマ：谷戸で一番最初に出てくるヤンマ。小型でシオカラトンボ程度の大きさです。森の中の浅い湿地を好み、春から初夏にかけて観察できます



コヤマトンボ：森の中や森に面した沢を好みます。谷戸では夕方と朝方に観察できます

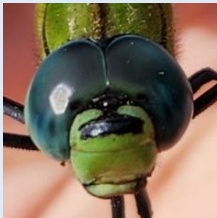
目がポイント！



コオニヤンマの顔
目と目が離れている



オニヤンマの顔
目の一部がくっつく



クロスジギンヤンマ（左）とコヤマトンボ（右）の顔。目が完全にくっつく



自然環境保全センターでは、傷病鳥獣の救護業務として、県民の方により持ち込まれた県内の傷ついたり弱ったりした野生動物（鳥類と哺乳類の一部）を收容し、必要に応じて治療やリハビリを行い、野生に戻す業務を行っています。この「かわせみ通信」では、持ち込まれた野生動物の「救護原因」や「リハビリ状況」などの情報を掲載しています。

秋冬事故多し！野生動物のくらしと交通事故の関係

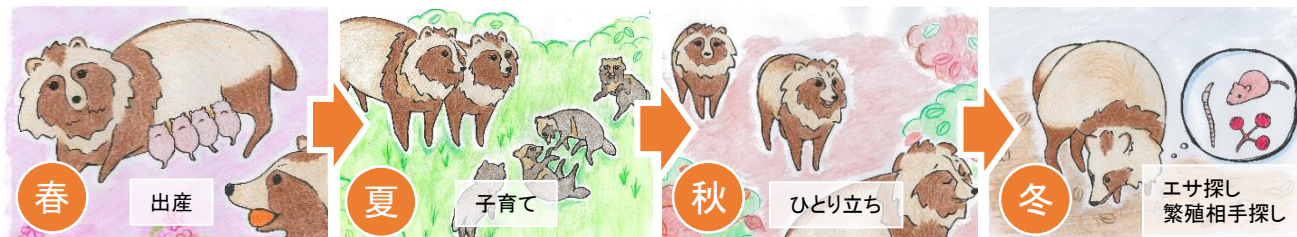
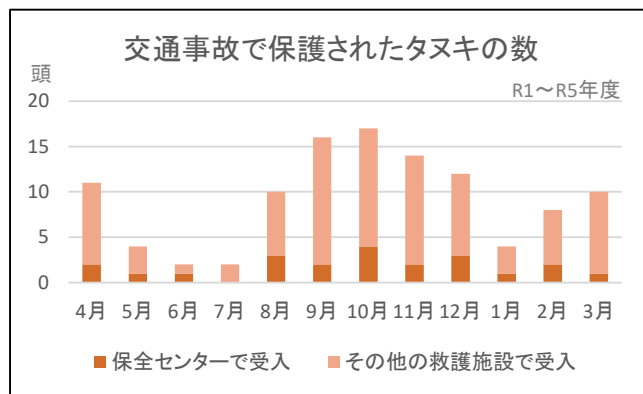
だんだんと日が短くなるこれからの季節、生活の中で交通事故防止を呼び掛けるキャンペーンを目にすることもあってはいませんか。実は野生動物も秋に交通事故に遭う傾向が多くなります。今回は、タヌキを例に野生動物の習性と事故の関係についてご紹介します。

■なぜ秋になると事故が多くなる？

県内で交通事故により保護されたタヌキの数を抜き出してみると、9～11月頃多くなることがわかります。その場で死亡してしまうケースもあるため、実際に交通事故に遭っている数はもっと多いかもしれません。

タヌキの生活を見てみると、春に出産し、夏の間親とともに行動し成長した仔ダヌキは、秋になるとひとり立ちします。若いタヌキは自分でエサを探し、自分の縄張りを確認しなくてはならないのであちこち動き回りますが、まだ経験が浅いため危険な場所などの知識が乏しく、事故に遭いやすいと考えられています。

タヌキは夜行性のため、夜間に地面に落ちている木の実や虫などのエサを探して道路のそばに出てくることがあります。このとき、車のライトなどにびっくりすると、気絶したり、体が動かなくなったりする「疑死（ぎし）」という習性もあり、そのまま車に轢かれてしまうことが多いようです。



交通事故で骨折したタヌキ

■交通事故に遭うとどうなる？

交通事故で骨折などの大ケガをすると、治療で1か月以上安静が必要となることが多いです。本来自然界にいるタヌキたちにとって、救護施設で人間の視線を受けること自体がストレスとなり、エサを食べなくなったり、自傷行為をしてしまい余計に野生復帰まで時間がかかってしまう場合があります。逆に人間に慣れすぎると再び事故に遭う可能性が高くなってしまいますので、お世話をする職員は悩むところです。

■道路を使うのは人間だけではありません

野生動物は森の中ややぶの中を歩くと思われがちですが、基本的には歩きやすいところを選ぶため道路も使います。エサを取りやすい場所であれば頻繁に利用することもあります。

タヌキなどの哺乳類の他、サギ類やカモ類、フクロウなども交通事故で保護されることがあります。フクロウは車のライトを浴びると目がくらんで動けなくなることがあるようです。

日中、夜間にかかわらず「誰もいない」ように見える道路でも野生動物たちが出てくるかもしれません。「動物がいるかも」とスピードの出しすぎやカーブの先には注意して運転すると事故が減るかもしれません。



交通事故疑いで保護されたヒドリガモ。頭が腫れ、翼の骨折がありましたが、幸いにも放野できました

「野生動物救護展」を開催しました！

8月23日土曜日に、当センターの傷病動物救護の取り組みを紹介する「野生動物救護展」を開催しました。「野生動物の救護って実際はどんなことをしているの？」や「身近な野生動物との関わり方」などが学べるパネルやはく製などを展示しました。また、通常は非公開である救護現場の見学会を実施しました（事前申込み制）。暑い日にもかかわらず100名以上の方々にご来場いただきました。



展示会場の様子



【パネル】救護原因と私たちにできること

救護記録から、野生動物がどのような原因で傷ついているのかが分かります。私たちの少しの配慮で防ぐことができるものもあります。



はく製展示

救護件数の多い動物を中心にはく製を展示しました。



クラフトコーナー

野生動物救護の会のメンバーによる野鳥の羽根標本や羽根を使ったしおり作りのワークショップを行いました。



生体展示

当センターに持ち込まれ、残念ながら野生復帰できなかったチョウゲンボウが参加。普段間近で見ることのない野鳥の姿に皆さん興味深々でした。

【パネル】救護記録

救護記録から、県内各地でさまざまな野生動物が救護されていることが分かります。野生動物が実は身近な存在であることに気付かされます。



NPO活動紹介

当センターでボランティア活動等を行う野生動物救護の会による活動紹介。羽根標本や野生動物調査の道具などを展示しました。

救護現場の見学

野生動物救護ボランティアの活動に関心のある方を対象に、動物を治療・飼育しているエリアの見学会を実施しました。参加者には、外からエリア内に感染症などを持ち込まないように、職員と同じマスクや防護服も着てもらいました。皆さん熱心に獣医師の解説を聞き、質問もたくさんあがりました。野生動物を扱う苦労や難しさ、いつも全力で治療している職員の熱意を感じてもらえたでしょうか！？



今回の展示や現場見学を通して、当センターの取り組みや身近に生息している野生動物たちのことを知ってもらい、良い機会となったかと思います。この展示をきっかけに、一人ひとりが自分にできることを考えたり、野生動物との正しい付き合い方を意識していただけると、職員一同とても励みになります。

今回残念ながらご来場できなかった方は展示室の常設展示をご覧ください。また、来年度以降も野生動物救護展は開催する予定ですので、ぜひお越しください！